

信じる力

愛媛県立松山東高等学校 2年 兼頭 玄

「マカンブル（おかゆをお食べ）」

故郷の島にいるような安心感に涙が出た。数日前から酷い下痢に苦しんでいた。ダガット村のホストマザー自慢の川魚の料理も本当は食べる自信がなかった。英語も通じぬ状況に絶望しかけた。でも彼女は僕の気持ちが見えるみたいに一番望む環境を提供してくれた。ご馳走を用意していたはずなのに。

僕の故郷は瀬戸内海の弓削島。傍にはいつも海があった。海は遊び場であり学校。その海で起きている変化に心を痛めた。中学生の時海洋プラスチックが世界で問題になっていることを知り、島から行動を起こしたいと海岸清掃イベント「ビーチクリーンクリスマス」を開催。しかし環境問題を知れば知るほど国境を越えた協力の必要を感じた。そこで海外の高校生と繋いで環境問題について議論を始めた。国や文化が違えば価値観や考え方も異なる。違いでぶつかり合うのではなく、違いを活かすことはできないか？

僕は、異なる国の学生同士が相互の違いを理解し、活かしながら共同して国際課題の解決を話し合うプログラム「Happy Learning ～国際社会科」を考案。3月「世界の高校生が考える超 Happy な未来」と題して松山と弓削島、米国、インドを結び約50人の学生が参加してプログラムを実施した。熱帯雨林保全をテーマに、ロールプレイング形式で様々な立場に分かれ議論した。インドの高校生の言葉が頭に残った。「地域には生活がある。森林開発を否定しても問題は解決しない。」

自分は物事の一面だけしか見ていないのではないか？開発途上国の実態をこの目で確かめたい。イベントの講師を務めてくれたサラヤ株式会社調査員中西さんの案内で、8月マレーシア・ボルネオ島の森林保全研修に参加した。まさに政府、NGO、企業などが国際協力で国

際課題解決に取り組む現場だ。

地平の果てまで油ヤシ農園が広がる光景に衝撃を受けた。写真で見た以上だ。実際パーム油の需要は伸び続け開発も拡大している。住民はどう思っているのか？疑問をぶつけた。

「生活は良くなった。油ヤシ農園は欠かせない。」一方で「森は大切。小さい頃から森の恩恵を受けてきた。」とも言う。矛盾しているがそれこそが真実だと感じた。冒頭ダガット村は自然保護区という立地を活かしてエコツーリズムで地域を自立させようと取り組む現場だが、多くの住民は保護区外に移住してしまった。保護区内は車も入れず不便だからだ。

理想だけでは問題を解決することはできない。体調不良も重なり心が折れかけた時、おかゆが勇気をくれた。この村の人は言葉も通じない国の若造を思いやってくれる。僕の島の人達も口にせずともお互いを思いやったり、逆に文句を言い合いつつも一つにまとまったりしながら支え合って暮らす。ああ同じだ。言葉や利害の違いは乗り越えられる。

ボルネオでは開発側の農園事業者が実施する植林活動や、分断された森林を繋いで動物を保護する緑の回廊作りの現場も見た。一見矛盾だったり焼け石に水だったりのようにも、これこそ人間の可能性だと僕は気づいた。

人間は他者の感情を想像したり、未来を推量したりすることのできる唯一の動物だという。その力で争い合ったり絶望したりもする。だが我々は同じ力で、他者を思いやることができ、未来に希望を持つことができるのだ。一方的な価値観を押し付けるのではなく、対話を重ね互いの立場を思いやって一緒に未来への解決策を探ることができる。人間の良心を信じ、仲間を信じ、未来を信じよう。

環境活動を始めた時、不安で一杯だった僕を仲間が助けてくれた。やがて仲間が増え複数の学校の学生が連携する「みんなのおそうじま」に発展した。島の外にも輪を拡げよう。そう、仲間を信じるのだ。「Happy Learning」で仲間と未来を考えていこう。未来を信じるのだ。

今は小さな力でも、信じ続けることで、僕らは必ず未来を変えていける。